



・巻頭言……………1	・豆手帖 ⑤② ……………3
・研究所活動報告……………2	・催し物案内等 ……………4



民俗系博物館における 仏像調査の思い出

文芸学部教授 藤岡 穰

本年4月に文芸学部芸術学科に着任した藤岡穰と申します。東洋美術史、特に仏教美術を専門としています。前任の岩佐光晴先生に引き続き、民俗学研究所の所員を兼ねさせていただくこととなりました。宗教に関わるモノを研究対象としていますので、民俗学は隣接研究領域のひとつに違いありません。ただ、正直に申し上げると、これまではあまり民俗学と関わりをもつことはありませんでした。とはいえ、まったく関わりがなかったわけではありません。以下、ご挨拶代わりに、これまでに訪れた民俗学に関わる博物館のことをご紹介したいと思います。

私は東アジアの仏像を研究対象としてきました。なかでも隋唐時代の仏像を検討するにあたり、その核となる長安造像を解明する必要があると考え、その一環として西安で収集した仏像や道教像を数多く所蔵するシカゴのField Museum（フィールド自然史博物館）に調査に行ったことがあります。自然史博物館になぜ中国彫刻が所蔵されているのか不思議に思っていたのですが、訪れてみてその理由が分かりました。同館のコレクションは1983年に開催されたシカゴ万博の展示品を始まりとし、その後、動植物や鉱物などのコレクションを充実させ、自然史ならびに人類学の博物館として発展してきました。広大な館内には世界各地の動植物標本が地域ごとに再現的に展示され、あわせて民俗資料も展示されています。まさに自然と人類史をダイナミックに展観、研究する博物館であることを実感しました。そのなかで中国の道仏像は、中国の民俗文化の一端を伝えるためのコレクションだったのです。これらは1908～10年にブラックストーン夫人の基金によって実施された中国・チベ



ットの人類学・考古学調査の成果によるもので、道仏像は主に西安周辺で収集されたものでした。早い時期の収集品であり、贋物はほとんどありません。砂岩でできた道仏混淆の像には陝西省北部のやや地方的な作例が多いものの、大理石ないし石灰岩製の隋唐の仏像はまさに長安様式をしめすもので、しかも紀年銘をもつものが少なくなく、稀少な不動明王像も含まれます。もっとも、これらはほとんどが収蔵庫で保管されています。

もう一つはローマにある文明博物館です。同館はピゴリーニ国立先史民族博物館、イタリア国立東洋美術館などが2016年に統合してできた博物館で、そのうちピゴリーニ博のコレクションには明治時代に日本に招かれたイタリア人彫刻家ラグーザが持ち帰った品々が含まれます。日本ないしアジアの民俗資料として受託されたものですが、そのなかに2体の興味深い金銅仏があります。2016年にローマで開催された日本仏像展に随行された国立文化財機構の方からその存在を教えていただいたのですが、写真を目撃して朝鮮三国時代のものだらうと思いました。私も翌年2月にさっそく訪れ、蛍光X線分析も含む調査を行ったところ、仏立像は大変にできの良い百済仏と思われたのに対し、誕生仏については残念ながら疑問符がつきました。日本での収集品とみられますが、三国時代ないしそれ風の仏像を選び取るとは、ラグーザはお目が高かったのかも知れません。

仏像研究を続けてきた私が、これまでもっとも参照させていただいてきたのは文献史学、考古学、仏教学であり、ついで建築史学、文学といった領域でした。しかし、もっと広い視野に立てば、民俗学とも協働できることがあるに違いありません。少なくとも、民俗資料のなかに貴重な仏像が紛れ込んでいる可能性はあると思います。私の成城での任期は7年間と短いのですが、その間に何か一つでも研究所に貢献できたと思っています。（所員）

研究所活動報告

◆所員研究例会要旨 令和8年7月9日(木)開催

「中国古代における死生観の展開」

小澤正人

本講演では、秦漢時代から隋唐時代に至る古代中国の死生観について、考古資料や文献資料をもとに、その変遷をたどった。古代中国では、死者が向かう「地下世界」と、より望ましい行き先としての「天上世界」という二つの世界が想定されていた。この構造は長く維持されたが、仏教の受容によってその内容は変化した。

秦漢時代には、死者は地下世界で地上と同じような生活を続けると考えられ、秦始皇帝陵や漢代の墓には、死後の生活に必要な什器や食料、人物・動物をかたどった俑などが副葬された。告地策や鎮墓文からは、地下世界にも地上と同様の官僚機構があると想像されていたことがうかがえる。一方、天上の神仙世界へ昇る「昇仙」も望まれ、馬王堆漢墓の帛画や後漢の画像石にその世界観が表されている。死者の安寧は子孫の繁栄につながると考えられたが、同時に死者がも

たらす災いも恐れられ、鎮墓文には「生死異路」として両者を切り離す意識も表れている。

魏晉南北朝時代以降も、死者が地下世界で地上と同様の生活を送るという伝統的な観念は継承され、唐代の墓も死者の住居として整えられた。その一方で、仏教の浸透により、昇仙に加えて弥勒菩薩の兜率天や阿弥陀仏の極楽浄土への「往生」が望まれるようになり、唐代以降には極楽浄土への往生が大きな比重を占めた。また、地獄や餓鬼道に堕ちた死者の救済が重視され、南北朝期の孟蘭盆会に続き、唐代後半から五代にかけて十王信仰や地藏菩薩信仰が広まった。これらは孝の思想や祖先祭祀と結びついて受け入れられた。

このように古代中国の死生観は、死者が地下で暮らすという伝統的観念を維持しながら、仏教の受容によって大きく変容した。しかし、「死者の安寧を願い、生者とのつながりを保つ」という考え方は一貫していた。こうした思想は日本にも伝わり、祖霊信仰などと融合しながら、お盆や地藏信仰、極楽往生など今日の宗教的習俗にもつながっている。(主事)

極楽浄土へ往生できるとは考えられていなかった。そのため、「四天王寺の西門が極楽浄土の東門に相当し、四天王寺に参詣すれば極楽浄土へ往生できる」と説く『四天王寺縁起』に記された聖徳太子の教えは、当時の人々にとって非常に魅力的なものであった。身分や性別を問わず、また仏教に関する知識が少ない人々にとっても、『四天王寺縁起』に記された太子の言葉を信じることは容易であったと考えられる。

12世紀前半になると、四天王寺に参詣する人々は後を絶たなくなった。人々は聖徳太子を極楽浄土へ導いてくれる存在であると信じ、熱心に祈った。なかには、門の先に広がる海に入り、命を絶つ者さえいたという。

聖徳太子は救世観音であると同時に、現世に人間として存在した救済者でもあった。その太子を敬う聖徳太子信仰は、人々を差別することなく、具体的かつ平易で、確実な救済を示したのであり、そこに大きな魅力があったに違いない。そして、これこそが聖徳太子信仰の特質とみることができる。こうした特質を有していたからこそ、聖徳太子信仰は発展し、現在にまで受け継がれてきたのである。(研究員)

「聖徳太子への祈りと四天王寺」

—平安時代の聖徳太子信仰—

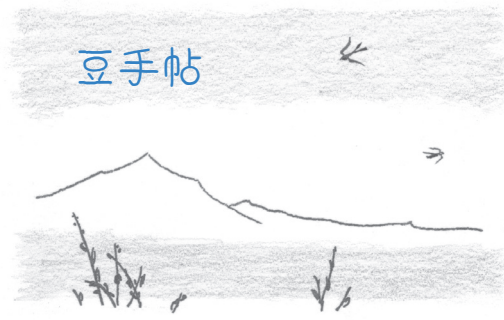
榊原史子

聖徳太子に皈依し、礼拝・供養することを聖徳太子信仰(太子信仰)といい、その信仰は仏法に対する信仰のなかで、今日に至るまで継承されてきた。

古代から多くの聖徳太子伝が著され、太子にまつわるさまざまな伝説が形成されていった。平安時代中期には『聖徳太子伝暦』が成立し、聖徳太子を救世観音の化身とみなす信仰が確立された。こうした聖徳太子観を背景として、聖徳太子信仰はさらに発展していったのである。

11世紀初頭になると、聖徳太子に仮託して『四天王寺縁起』が四天王寺の僧侶によって作成された。『四天王寺縁起』は人々に大きな影響を与え、四天王寺は法隆寺以上に聖徳太子信仰の中心地となっていた。

当時は浄土信仰が隆盛しており、極楽浄土への往生は人々の悲願であった。しかし、誰もが無条件に



「小京都」の現在(1)

成城大学名誉教授 松崎 憲三

本研究所のプロジェクト研究の成果『小京都と小江戸～うつし文化の研究～』(岩田書院 2010年)を刊行したその年の秋、朝日新聞京都総局の女性記者から連絡が入った。『『小京都』離れが進みつつあり、そのことについてお伺いしたい』との内容であった。ちょうど文化史学科3年の研修旅行で、伊勢・伊賀を経て奈良へ出向く予定だったので奈良駅で待ち合わせ、1時間余り取材に応じた。しかしなかなか記事にはならず、平成23年(2011)4月23日付朝日新聞に掲載されていたのは、「GWに訪ねてみたい小京都」なる見出しのものであった。時期尚早とあの企画はつぶされたのだと思い、少し残念であった。ようやく「小京都から独立する観光地」なる記事が掲載されたのは、だいぶ経った平成30年(2018)7月21日のことである。そうした経緯を思い出しつつ、改めて「小京都」の現状を垣間見ることにしたい。

なお、成果報告書のサブタイトルにある「うつし文化」とは、モデルとなる地域の景観や文化の象徴的な部分を移入・再構成し、その上でモデルとした地域の名を冠したもので「小京都」、「小江戸」がその代表例である。ともに文化の伝播ともかわるが、高度経済成長以降旧国鉄のディスカバー・ジャパンなるキャンペーンに伴って広がり、市民権を得た。とはいえ、必ずしも全ての「小京都」がそうしたキャンペーン以降に生み出されたというものでもない。

村井康彦は『小京都へ』(平凡社 1975年)なる小著の中で、「小京都は、戦国大名たちが分国支配の拠点として営んだ城下町の出現と同じくしている」と指摘した上で、武家的小京都の典型として越前の一乗谷や山口を、また、公家的小京都の典型として土佐中村を取り上げて領国文化に言及している。ただし、小稿の目的は領国文化(中世文化)の理解をめざすものでもなく、「小京都」と称するに至った経緯とその後の展開・現状を把握することを目的とするものである。いずれにしても、村井の『小京都へ』は先駆的業績として評価できる。

村井によれば、「小京都」たる要件は、

- (1) 京都との自然的景観の類似性があげられる。周囲の山や丘陵は東山・西山、あるいは北山に擬せられ、市中を流れる川はそのまま鴨川であった。
 - (2) 基盤の目の町並、古い民家や寺町通り、それらが醸し出すしっとりとした雰囲気、いわば人為的景観における京都との類似性がある。
 - (3) 古都京都と同様、歴史が生み育てた古い伝統・習俗や産業などが保持されているマチ。
- 以上三つに集約できるという。

ところで、令和7年(2025)段階で「小京都」と銘打つ市町が36あり、「京都ゆかりの町」として本家・京都市を中心に「全国京都会議」を結成し、連携・交流活動を推進している。「全国京都会議」は、昭和60年(1985)に、京都市を含む27市町の参加を得て結成されたもので、その加盟条件は次の通りである。

- (ア) 京都に似た自然景観・街並、たたずまいがある。
- (イ) 京都と歴史的繋がりがあがる。
- (ウ) 伝統的な産業・芸能がある。

このうちどれか一つでもあてはまれば良しとする、比較的ゆるやかな基準である。村井が掲げた「小京都」たる要件と比べると、

- (ア) は(1)と(2)に相当し、「自然的・人為的景観の類似性」があるということで、(ウ)は(3)に対応する。(イ)だけが「全国小京都会議」独自のものといえる。鯖街道で京都と繋がっている小浜市や、仙洞御所の庭に同町浜海岸の「一升石」を献上したという神奈川県湯河原町がその例である。

「全国京都会議」の連携・交流活動は、本家京都や他の小京都への旅を促す、あるいは芸能大会や物産展に相互参加する、等々の事業が主たるものである。全国的な交流のほか九州地方、〇〇地方というようにブロック毎の交流も行われており、地域間連携・交流が複数の自治体に及んでいるという点に特徴を見出すことができる。(第八代所長)



津和野町弥栄神社の鷺舞
(高木大祐氏撮影)



民俗学研究所特別展

柳田國男と民俗学

—はじまりとしての旅—

会期：11月2日～30日

※土日、11月4日・23日は休館

時間：午前10時～午後4時

会場：民俗学研究所展示室（大学4号館3階）

※日程が変更になる場合があります。ウェブサイト (<https://www.seijo.ac.jp/research/folklore/>) をご確認ください。

電話：03-3482-9097（平日午前9時～午後5時）

メール：minken@seijo.ac.jp



「柳田國男と民俗学—はじまりとしての旅—」は昨年度、柳田國男生誕150年を記念して開催されましたが、たいへん好評をいただいたため、展示の一部補修や入れ替えをおこなったうえで、リニューアル開催いたします。

学生時代より産業組合に関心を寄せた柳田國男は大学卒業後、農商務省に入省し農政課で産業組合の啓発普及活動に従事します。退省後、朝日新聞論説委員、国際連盟委任統治委員などを歴任し、日本や世界の各地を旅するこ

とを通して、後の民俗学研究の方法的基礎を築いていきました。それはやがて、新渡戸稲造らとともにおこなった郷土会の内郷村調査、山村・海村などにおけるいわゆる百項目調査へと発展していきます。

展示ではこの民俗学研究の体系化・方法化のプロセスを、「旅」をキーワードにしつつ、初期の経済史研究や後年の教育学との協働をも視野に入れ、学際的展開としても理解できるよう資料提示します。ぜひご観覧下さい。

編集後記

民研ニュース154号をお送りします。巻頭言には、今年度より新たに所員に加わられた藤岡穰所員よりご寄稿をいただきました。海外の博物館における仏像調査のご経験を通して、美術史と民俗学の接点について綴っていただいております。また、「豆手帖」では、松崎憲三元所長より、かつての研究所プロジェクトの成果を踏まえ、「小京都」の現状についてご寄稿をいただきました。研究所活動報告では、7月9日に開催された所員研究例

会より、小澤正人所員による中国古代の死生観の変遷に関する報告、ならびに榊原史子研究員による平安時代の聖徳太子信仰と四天王寺に関する報告を紹介しています。今年度も11月2日から30日まで、民俗学研究所特別展「柳田國男と民俗学」を開催いたします。昨年度の柳田國男生誕150年を記念した展示を一部リニューアルしたものです。多くの皆さまにご来場いただければ幸いです。

末筆になりますが、ご協力いただいた執筆者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

民俗学研究所ニュース No.154



令和8年10月15日発行

編集兼発行人：成城大学民俗学研究所主事 小澤 正人

〒157-8511 東京都世田谷区成城6-1-20

TEL：03-3482-9097・9098 Fax：03-3482-7763

mail：minken@seijo.ac.jp